

Niti 類について

細 川 暢 彦

ビルマのパーリ語文献のうちにあって、極めて庶民的でビルマの民俗の一端を知る資料として有効なニーティと呼ばれる一群の文献がある。既に J. Gray によって 1886 年にローカニーティ、ダンマニーティ、ラージャーニーティ、スタワッダナニーティ（これはスッタワッダナニーティとするのは誤りであるとされている）という四種の niti が英訳によって紹介されている¹⁾。これに加えて近年（1981 年）パーリ聖典協会から Pāli Niti Texts of Burma と題して極めてすぐれた研究とともに批判的な校訂本が校訂出版された²⁾。この校訂本には、Dhammanīti (Dhn.), Lokanīti (Ln.), Mahārahanīti (Mhn.), Rajanīti (Rn.) の四つのテキストが含まれている。我が国においては、既に Lohanīti がビルマの長老によって和訳され³⁾、紹介がなされており、池田正隆先生によって、ローカニーティのローマナイズによる校訂も行なわれているようである。筆者も Dhn. に関する紹介をなした⁴⁾が、今回はパーリ聖典協会から刊行されたテキストを中心に、Niti 類研究上の問題点に就いて二、三の指摘をなしておきたい。

まず第一点は Niti 類独自の語法を描出するという点である。従来、Niti 類の源泉を求めるといふ形で行なわれた研究には、ジャタカ類やパーリ語三蔵及びアッタカターへの回帰という方向の諸研究が念頭に浮かぶ。

詳細に述べれば、Dhn. ではパーリ仏典とパラレルな詩句が 129 偈ある。それらのうちには Ja に源泉を求めうるものが 106 偈ある。同様に AN に源泉を求められるもの 13 偈、Th. が 10 偈、SN、9 偈、及び Dh. がそれぞれ 8 偈、Vim 及び Sn が 4 偈、DN、Niddi が 3 偈、Kv が 2 偈、MN、Patis Mil、Smp が 1 偈ずつ平行な句を共有すると見ることができる。このうち Th. 1025 偈は PTS 版には指摘がなされていない。従って、PTS 版とは平行句の数え方が一偈異なり、延べ 162 偈がパーリ語仏典の中に平行な句を有することになる。サンスクリット文献に関しては、筆者の専門を異にする分野で、PTS 版に全く依存した結論となるが、Dhn. においては 129 偈がサンスクリット文献にその源泉を見い出すことができる。これらのサンスクリット文献のうちにはヒトーパデーシャやパンチャタントラなどよく知られているが、Dhn. の中では Buddhacarita が一カ所だけ平

行句に掲げられているのが注意せられてよいであろう。Ln. ではパーリ語仏典に平行な、パラレルな偈文を69偈あげることができる。それらのうちでは Dhn. の場合と同様に平行句が指摘できるものに Ja の詩句が20カ所、Dhp. 8カ所、It. 及び Sn. 2カ所、それらに続いて SN, AN, Th, Mil. が1カ所ずつあり、Vism. や Sv. にもそれぞれ1カ所ずつ偈文が平行となっているということである。この Ln. に関しては、その源泉の研究は、PTS 版の校訂である、H. Bechert と H. Braun らより、L. Sternbach の業績が重要であるが彼ら二人も L. Sternbach の業績を参照しているようであるので、詳細は PTS 版の研究によって良いのではないと思われる。Ln. の場合はサンスクリット文献にパラレルな詩句を有する偈の数は三十偈と全体の約18%となり、どちらかという全体の構成はパーリ仏典に傾いているようである。

Mhn. の場合、サンスクリット文献からの引用は全体 254 偈のうち96偈あり、パーリ仏典からの引用は55偈となっている。これらのうち Ja に平行と思われる詩句を41偈、Th. に8偈、SN. 及び Sn. に4偈ずつあり、DN. と Kv. に2偈、It. と Dhp, Vism. にそれぞれ1偈ずつ平行なる詩句が見い出される。Ln. や Dhn. に比べると、パーリ仏典にその源泉を見出しうる偈は少なくなっており、Th. からの引用が目立つようである。

Rn. の場合はパーリ仏典からの引用はなく、全体 134 偈のうちに82偈までがサンスクリット語の文献にその源泉が見出し得るという状況である。

このように見てみると、結論を先取りしたかたちになるが、Ln, Dhn, Mhn, Rn. の順にパーリ語仏典とのかかわり合いが少なくなっていることに気づくのである。

さて、これらの Niti 類の源泉をたどるという研究によってどのような一面が明らかとなるかと言うと、Niti それぞれの成立年代や、成立期におけるビルマでのサンスクリット文献等の流布の状態を推定することができ、さらには Niti 各々の偈文理解への大きな手がかりを示すことができるのである。加えて、先に述べたパーリ語仏典としての重要度のようなものも見理出し得るのではないと思われる。

これに反し、Niti 類の Niti 類たる独自性はどこに求められるであろうか。

この問題については、シャタカ類にその源泉を見出し得ない偈文についてもその意味が考えられるべきであろう。

Dhn, Ln, Mhn. の三種の Niti に共通な詩句で、しかもパーリ語文献にもサ

ンスクリット文献にもその源泉を見い出しえない偈文は五偈ある。それらは、Dhn. 46=hn 52=Mhn. 53, Dhn. 89=Ln. 89=Mhn. 194, Dhn. 222=Ln. 131=Mhn. 187, Dhn. 269=hn. 119=Mhn. 190, Dhn. 369=hn. 24=Mhn. 49 の五偈である。試みに Dhn. 46偈を見ると

apuṭṭho paṇḍito bherī pajjemo hoti pucchito

bālo puṭṭho āpnṭṭho pi bahnṃ vikatthate sadā

賢者は尋ねられずば太鼓のようで、尋ねられれば雨雲のようである。愚か者は尋ねられても、尋ねられずとも多くを常に誇っている

という内容である。これにより、Niti 類の内容や語法などが極めて素朴であることが理解されよう。同時に Niti 類の互換性、あるいは共通性についても触れるならば、Dhn, Ln, Mhn, には共通の詩句があるが、Rn. にはこのような共通の詩句はない。最も Dhn. と Rn. には共通の詩句が3偈ほどあり、Ln., と Rn., との間にも Mhn. と Rn. との間にもそれぞれ共通の詩句が1偈ある。従って、Rn. Dhn., Ln., Mhn., と Rn., との間には共通の詩句が背無であるとは言切れないが、それらの四種のテキストの中では Rn. は少し性格を異にすると考えられよう。

同様のことは Dhn., Ln., Mhn., Rn., の四つのテキストの章だてを見ても考えられる。これらの章だては、Dhn. が総偈数414偈で24章、Ln. は総偈数167偈で7章、Mhn. が254偈で4章、Rn. は134偈で章だてなしと言った構成になっている。章の名称も Dhn. と Ln., Dhn. と Mhn., Ln. と Mhn. がそれぞれ類似した章名を有している。しかし、Ln. が167偈と少部なのに7章にも分かれたれているにもかかわらず、Mhn. は254偈で四章しかない点と、Rn. が134偈で章立てがない点は注意すべきであろう。この点で Ln. は非常によく研究され、愛読されたと見るのが妥当であろう。次いで Dhn., Mhn., Rn. といった順で研究愛読されたと言えはしないだろう。

以上の諸点から、パーリ仏典からの引用が多い、Ln., Dhn., Mhn., Rn. の順で研究されたと考えられる。Niti 類研究の上では編纂年代や作者名など不明の問題点が多く残されているがビルマ仏教の一側面を見る上で、Niti 類を看過しえないであろう。

<キーワード> Lokanīti, Dhammanīti, Mahārahanīti, Dajanīti.

(駒沢大学大学院)

註記は省略するがご希望の方はご連絡下さい。